津田梅子の生き方（6）～梅子・捨末　帰国の途に着く～

約 11 年の留学生活を終えて、梅子と捨松はともに帰国の途に着きました。

梅子の帰国が近づくと、ランマン夫妻は、梅子のために数百冊の本を用意したり、日本に帰ればなかなか手に入らないピアノを贈ったり、何かと心を配ってくれました。ランマン夫妻にとっても、実の子どものように愛情たっぷりに大切に育ててきた梅子との別れは、とても辛いことだったでしょう。

梅子は、ランマン夫人から大きな紙束を受け取っていました。梅子の手紙・作文等、幼少のときからの書きものの他に、日本からの手紙などがたんねんに整理してあり、ランマン夫人の覚え書きも添えてありました。ランマン夫人宛の母・初子の最初の手紙が原形を損なわれることなく現存していること等、梅子のアメリカ留学時代を今に伝える資料が残っているのは、すべてこうしたランマン夫人の行き届いた心遣いによるものなのです。

【留学中の3人の少女の写真】
左から津田梅子・山川捨末・永井繁子
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

帰路は、東部から西海岸までの汽車での長旅でしたが、チャールズ・ランマンがシカゴまで同伴してくれました。シカゴに到着すると、同志社大学で教鞭をとるため日本に向かう予定だったデーヴィス教授夫妻に 2 人を託して、ランマンは梅子と涙ながらに別れました。1882(明治 15)年の 10 月 1 日のことでした。

その日は列車でハントリーまで行き、梅子と捨松はそこで改めてデーヴィス一家の歓待を受けると、12 日には、アメリカ大陸横断の旅へと出発しました。ミシシッピ川を超え、途中ユニオンパシフィック鉄道に乗り換え、14 日には、チェイエンヌという町に入りました。ここはデーヴィス教授が教会設立に関係した町で、彼の説教が、翌月 1 日の夕方に町のオペラハウスで行なわれる手筈になっていました。おかげで梅子と捨松はここで数日間ゆっくりできました。2 人が世話になったのは、デーヴィス教授の友人スターク氏の家でした。町の新聞が梅子と捨松のことを取り上げ、2 人は人口 5,000 人ばかりのこの町ですっかり有名人になっていました。記者が取材に来て大騒ぎになったといいます。それを受けて、捨松が代表して「私たちがアメリカに来た理由とその帰国について」と題した発表を堂々と行いました。

サンフランシスコに到着すると、今度はランマンの友人でカリフォルニア大学の秘書だったボンテ氏宅でお世話になりました。一行が乗る予定の太平洋航路「アラビック号」の出航まで 10 日ほどあったので、梅子と捨松は、カリフォルニア大学を案内してもらったり、夫人に買い物に連れて行ってもらったりしながら、最後のアメリカの生活をゆったりと楽しみました。

1882 年 10 月 31 日、アラビック号がサンフランシスコの埠頭を発ちました。しかし船は 2 日後から揺れ始め、5日後には、立つことはおろかベッドに身を横たえることすらできない状況になったといいます。船の揺れがやっとおさまった 11 月 6 日から、梅子は船内にてランマン夫人に宛て手紙を書きました。帰国してからも、梅子は時間を見つけてはランマン夫人宛に手紙を書き続けました。その時その時の思いをまるで日記に記すように書かれた手紙の数は 450 通近くにも及んでいて、梅子とランマン夫妻の強い絆が窺えます。長い間それらの手紙は忘れられたままになっていましたが、梅子の死後 55 年を経た 1884 年に、まとまった形で津田塾大学本館屋根裏の物置から発見されました。現在では、当時の梅子について知る上で欠かせない貴重な資料となっています。

船が横浜に入港したのは 1882 年 11 月 20 日のことでした。横浜には、梅子と捨松の家族や、ともに留学した繁子らが迎えに来てくれていました。父親の仙に話しかけられた梅子は、キョトンとした顔をしたといいます。仙が何を言っているのかさっぱり分からない梅子は、日本語をすっかり忘れてしまっていたのでした。

梅子は、日本人であるというアイデンティティを持ちながらも、アメリカ人の心と言葉を持った 17 歳になっていました。

参考文献：亀田帛子『津田梅子―ひとりの名教師の軌跡』双文社出版　2005 年　263 頁